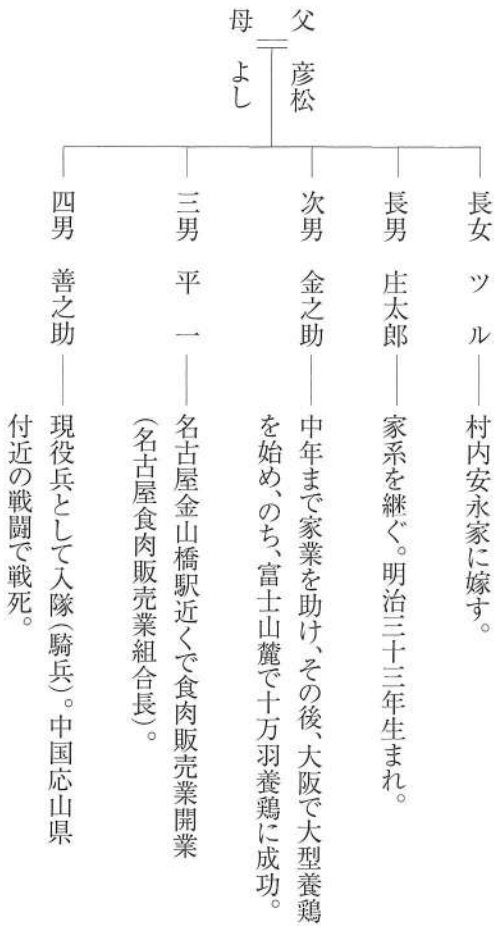
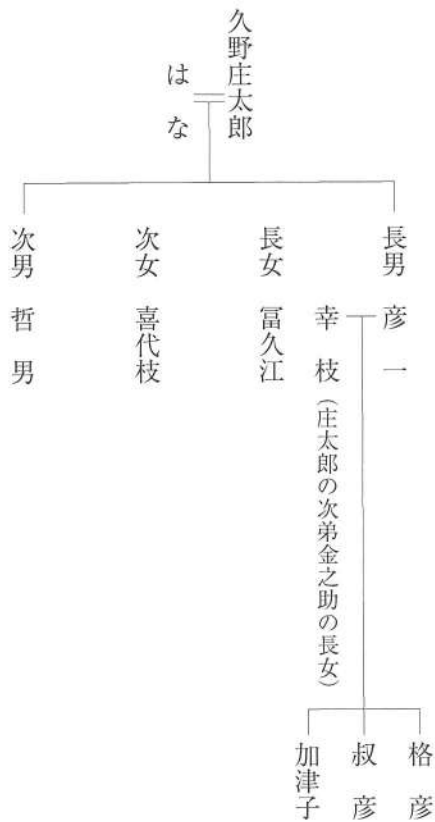


### 第三章 久野庄太郎の半生（久野庄太郎自伝より）

久野庄太郎は、明治三十三年（一九〇〇）十一月十五日、知多半島の西岸、八幡村中島の農家の長男として生まれ、父の代からの自小作農で、父は彦松、母は村内の上ゲ<sup>ア</sup>という所の浅井家の長女よし。父彦松に負けな  
い心優しい働き者で、親子兄弟仲のよい働き者一家であった。その家系は次のようである。



久野庄太郎家系（昭和元年、隣村横須賀町加木屋、久野田四郎次女はなと結婚）



### 師の恩

前述のごとく、生家は親の代から自小作農で、父彦松は根っからの働き者。早寝、早起き、毎朝、一人未明に起きて豚舎を一巡。豚肥を圃場に運び、私が起きる頃には、よい声で鼻歌を歌いながら帰って来て、一緒に朝食をしていた。父は大味な人柄で、小さいことにはこだわらないよさがあった。

母は同村の上ゲという所の浅井家の長女で父とは恋愛結婚のようであった。けっして富農とは言いがたかったが、とにかく働きの一家であった。一時は、小作地を含め、十五町歩を経営して、県下一の大農場の経営者であった。

その頃、小学校は四年制で、高等科が二年であった。ほとんどの農家の子供は四年終了で、家の手伝いか、丁稚小僧（ていぢこそう）に行くかであった。私は貧乏百姓の子沢山の家で、四年生まで、家の手伝いか、子守りで、満足に学校に行けなかった。その頃の四年生担任は中野錠助先生（註1）であった。先生はその頃二十五、六歳で、色白で外見弱々しく見える先生であったが、母思いで、信仰にも篤く、家には大きな仏壇があり、私も一緒に座って拜んだことがあった。私が子守りや家の手伝いで学校を休んだ分を取り返すために、夜自宅にこさせて、お駄賃まで下さって復習させ、学校の遅れを補って下さった。よほど物好きであられたらしい。うす汚い貧乏百姓の小倅をどう思っって可愛がって下さったのかわからない。

その頃の私の村は貧乏であった。これは私の村だけでなく、大正の初め頃の農村はどの村も貧乏であった。

百姓は冬の仕事がない。そこで藁細工で稼ぐか、石工、鍛冶工、土工（くる鋳）などで稼ぐしか仕事がない。ほかに正月前後、百日くらい漫才（註2）「尾張漫才」。エビス、大黒が出てくる知多地方に伝わる伝統芸能で、国の無形文化財にも指定されている）で各地を門付け（かじ）して廻る出稼ぎがあった。

私も十一歳、四年生の秋、母から、「手代（年期奉公）に行くか、漫才（農閑期の出稼ぎ）か、選んだ方に行け」と言われ、漫才を選んだ。

漫才なら、春になって帰ってきて、秋まで父母と一緒に暮らせる、と思ったからだ。ついに十円で百日間売られていくことになった。

さっそく、漫才の稽古に行かねばならない。すぐ中野先生の復習を休まねばならないので、

先生の所にお断りに行った。先生は秋過ぎて、葉のすっかり落ちた桑畑の中の井戸から水を汲んで、体を拭いておられた。先生はよほど驚いたらしく、「なに!? 漫才に行くか」と言われただけで、後は何も言わずに、ジーツと私の顔を見詰めて、眼を真っ赤にして、大粒の涙をポトリと落として、小さな声で、「庄太郎や、気をつけて行ってこいよ」と言われた。私も先生の涙を見て、悲しさがこみ上げてきて、涙が止めどなく流れて、何も見えなくなってしまった。

もちろん、先生の涙の意味はわからない。先生は読書好きで、義理堅く、外見は色白で弱々しく見えたが、体操、座禅、乾布摩擦などで日々の修養に努められ、教え子の悲しい心の奥まで同情しておられ、つい大粒の涙が出てしまったと思われる。

つねづね「漫才などには出かけてはいかん。村はよくならない、だが、漫才はやめよとも言えぬ。家の経済のことがある」「可哀そうに、この子も漫才で一生をそこなってしまうか」と言っておられた。

先生は一種の思想家であったと思う。今にして思えば、先生の脳裡に、こんな思慮が走っていたのではないだろうか。私はこの齢になっても思い出すと涙がこぼれる。

先生は数年前に亡くなられている。奥さんは健在で、年末には御挨拶に行き、大きな仏壇の前で心から先生の生前を想い、拜んだ。

先生は晩年、中風を病んでも、読書と日記を続けられ、何の不平もなく、いつも笑顔で「僕も俗物で、まだ如来の御姿を見ぬ」と誇張も失望もなく、一途に光明を求めて最期まで言行を正しく身をもって私たちを教えて、逝かれた。

私の漫才は八年つづけた。上手ではあったが、いやであった。貧乏の口減らしで、やむな

く門付け漫才に出た。辛い時、いやでたまらなかつた時、先生の充血した眼と大粒の涙を思い出して、一生の励ましの糧かてとしたし、また勇気づけられた。

これからは、貧乏で学校に行けぬ子供達のために書く。

### 子供の頃の正月

正月三日はよいもんだ。

雪の白さのママ食って

下駄の齒のよなモチ食って

と歌って、過ごした頃もあったが、私は正月は嫌いであった。私の正月は稼ぐ正月であった。私は八歳の秋（明治四十年）から遊芸人の鑑札を受けて、漫才に売られていった。

その頃、貧乏人の子沢山の家は、子供を全部家で育てる金も仕事もなかった。だから、漫才に行くか、年期奉公に行くかしか、しかたがなかった。

その頃、年期奉公と称した職人奉公は、兵隊検査までは無給、あと一年が御礼奉公、その後は、主人がよしと言うまで無給、そのあと別家（のれん分けの出店）、これが辛抱できずに年期を破ったものは、「包丁打ち」といって一生涯迷い者であった。小学校四年を卒業して、「小僧さ」に行く。奉公は盆と正月の二度だけ生家に帰らせてくれるだけ、途中で帰るような者は甲斐性なしとして一生「ウダツ」が上がるらない。

私の村から奉公先の信用を得て成功者となり、名古屋で億万長者になった人が沢山いる。

しかし幼い私は、正月が過ぎ、春になれば父母の下にいられる漫才に行くことにした。わ

がままな私は、漫才が嫌で嫌でたまらなかった。そして毎年、毎年、正月前がくると、漫才に行くのが嫌で苦しんだ。

### 豚を飼う

父は大正の初め頃（私は十二、三歳）、三河に行つて、仔豚を雌雄二匹買って来た。

その頃、私の村には豚は一匹もいなかった。初めて見た豚は可愛かった。ことに小さな尻尾が可愛かった。子供達が見に来て、「これが豚か」、「あれが鼻で、あれが尻尾」と大騒ぎをしていた。

豚は大きくなり、雌雄がはっきりしてきて、雌は仔を孕はらんで、三カ月後には仔豚が生まれた。父は豚の入れ場に困り、雄豚を名古屋の屠殺場に売りに行った。

当時まだ、問屋仲間でも、生きた豚を見たものが少なかつた。階楽亭という肉を食わせる店でも、枝肉を横浜から取り寄せているぐらいで、生きた豚を知らないほどであつた。

親父は豚が売れなくて、屠殺場に預けて来た。大正の初めとはまだそんなことであつた。売れない豚に困つて、家では毎日あれこれ相談し合つたが、よい知恵が出てこず、困つた。そのうちに仔豚が親になり、仔を生む。豚の入れ場がない。親父も困つた。豚に家を潰されてしまふと大騒ぎになつた。

ところが、二、三日したら、岩川という名古屋の肉屋がきて、預けてあつた豚を五文（十貫目〓三七・五キロ〓五円）で買つてくれた。そして豚の代金を十二円五十銭置いていき、次の豚も買うと言つてくれた。とにかく家の中が明るくなつた。

私の地方の田畑は、砂地であり瘠地で低収獲地帯であつたから、堆肥の給源に養豚をすす

めたが、臭い、蠅が多いといって誰も豚を飼わなかった。その頃、わが家では肥育豚で利益を上げて見せた。

また、仔豚の繁殖で儲けて見せた。これを見た近隣の農家が養豚を始めた。

### 豚欲の失敗

私の農業経営の経験によると、たとえば、よい米を沢山取りたいという「好き百姓」をやっておれば、自然に儲かるものであったが、欲でかかると儲からなかった。親子一心になって一生懸命に働いて大損をした経験がある。

大正の初め頃、私の家はこの地方で一番早く豚を飼って儲けたと前に書いた。そして人もすすめて養豚を始めた。豚に慣れたのはよかったが、豚で儲けようとして、豚に喰い潰されそうになった。

大正の末期頃、この地方の農家も豚を飼い始めた頃で、生豚一貫目八十錢ぐらいでこれを八文と呼んでいた。上手に飼うと一日一頭三錢の飼料代で百匁（三七五グラム）ぐらいに肥えるから五錢の儲けがある。それと肥料が取れる。百頭飼えば五円の利益と肥料が取れる（一人で一〇〇頭ぐらい管理は可能）。その頃、一日労賃は七、八十錢ぐらいで、大規模に豚を飼えば大変儲かる算盤そろばんになった。「そのうち、十文ぐらいの値がくる」「面白いぞ」と、親子合意で飼い始めた。豚の種付けは得意で、仔豚を取ることは上手であった。近隣の人にも頼まれて分譲して、よく儲かったものだ。大儲けが分かってきたから分譲せず、豚舎をふやして、どんどん飼った。

ちようどその頃、豚コレラはげが流行って、親子密談した。コレラで豚が死ぬから二十文にな

るぞ。その時まで三〇〇頭までにふやした。これで一財産つくるぞと割のよい計算をした。一〇〇頭、二〇〇頭とふえてくると、豚の奴、食うわ、食うわ、私は毎日飼料買い集め係となつて走り廻つた。味噌粕、米糠、さつまいもなど買い廻つた。

その時分、一トン積みトラックを運転手つきで一日借りると五円だったが、これを借りて買い集めた。一方、豚の糞尿をはじめのうちには農家に取り来ると野菜と交換して渡したが、多くなると汲み取りにならなくなった。糞尿の排出量は増加する。農家に頼みに行つても取り来ない。泥海のようになつて田畑へ流れ出る。どうしようもない。まさに糞尿攻めである。二十文になると目算した豚相場が、コレラで出荷が多く、だんだん値下がりして、ついに三文になつた。逆に売りたいくても、コレラを恐れて買い手が無い。肉豚は三文だし、まったく収入がない。豚舎が不潔だから伝染が早い。みるみるうちに何頭かの豚にダイヤ型の紋々が表れてきた。人に知られると移動禁止になるから隠していた。他の豚にも伝染するし、捨てるにも殺すにも始末がつかない。とうとう往生した。

私の家はみな健康であり、勤儉であつたから、小農でも裕福で、何千円かの貯金を持つていた。その頃、村で千円の貯金を持っている人が少なかった。千円かければ、立派な家が建つた。その時、豚に食われて貯金は尽きていた。働きまくつて貧乏になつていた。豚で大儲けをしようとして、豚欲の罪で大損をした。

幸か、不幸か、その時農商銀行が潰れて預金者が各銀行に殺到する取り付け騒ぎが起こり、預金も凍結されて引き出すこともできなくなつた。泣く人、怒る人で、やがて二十円以下の金は支払われた。皮肉にも私の家は十九円の貯金で全部支払つてくれた。

## 漫才から足を洗う

当時（養豚を行う以前）、郷里の農家は、肥料を名古屋の「屎尿」<sup>しにょう</sup>によってまかっていた。父はこの屎尿取り寄せ組合の組合長をしていた。ところが、海部郡の組合に権利を取られて、肥料を取り寄せることができなくなった。その後、半年くらいたつと、名古屋屠殺場の岩川が、「もっと豚を飼え、全部買い取ってやる」といつてきた。

そこで親父は、屎尿組合を養豚組合に切り替え、豚を飼って豚の糞尿を肥料とする方法に切り替えた。そして仲間に仔豚を飼わせた。豚が増えて「臭い」「蠅が多くなって困る」と地元から苦情が出た。親父は、「みんな豚を飼え、それならお互いさまだ」といつて押し通した。

名古屋でも豚が売れるようになって、さきの岩川は、「俺が豚を買うから豚を運んでくれ」といつてきて、私が大八車で運ぶことになった。肉屋も忙しくなり、「そちらで値をきめて、豚を買い、運んでくれ」といつることになり、家業も安定し、もう私も漫才に行くこともなくなり、農業に専念することができるようになった。

そして、ちょっとした実業家になったような気になり、この時、私も十八歳となつていて落ちついた。その当時の日雇い賃は一日三十銭くらいであったが、この仕事で一日一円くらいになったが、祖父は、「商売柄が悪い」といつて心配した。しかし、父は「楽して儲ける考えは駄目だが、車ひきならよかろう」といつて賛成してくれた。

苦節十年、ついに私は漫才をやめて、運送屋になることができた、心ひそかに喜んだ。

## 私の結婚

私の結婚は大正十五年の春であった。私が二十六歳、家内は十七歳、明治四十一年六月十四日、隣の横須賀町加木屋の生まれ。久野惣太郎の次女で、若い時から里の父について働いていたので、農作業に習熟して、働き者であった。わが家の嫁としては打ってつけの嫁であった。家事一切は母がするので、もっぱら農作業の担い手であった。

私は結婚記念に仲間四人と、豊川の下流の前芝から海苔の養殖技術の指導を受け、種網を買ってきて前浜において、海苔の養殖を始めた。知多半島の海苔の元祖である。

また、漁船を購入して雑魚ぞこを獲り、売れるものは売り、大部分は乾燥して肥料とした。こうして、わが家の農業は多角的で耕地面積も収穫量も県下一といわれた。この下手な農業が県下一かと肌寒かった。

この頃（大正の中頃より昭和の初め）になると、農業に家畜を導入、耕作、運搬に畜力を利用し、日々の生産物で金銭収入の道を開くと同時に肉用として現金収入をはかり、その糞尿で有機物肥料を田畑に施して地力を増強させ、水田の裏作に玉葱や、じゃが薯の早出しによる金銭収入を得る有畜農業、多角形農業が推奨されるようになってきた。

そして、その頃、山崎延吉先生が推奨された有畜農業、多角形農業の标本として、愛知県下の研農会にも名を連



26歳で晴れの結婚。妻はな、17歳



久野さんの海苔仲間たち

ねるようになった。

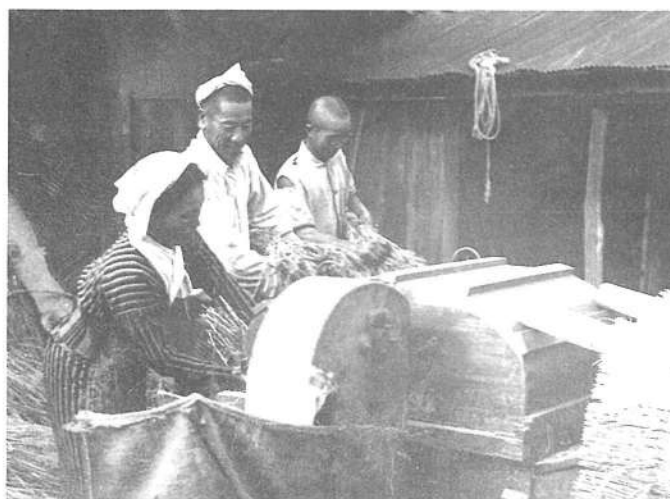
## 肥料

今日考えれば、夢のような話であるが、七、八十年前は、どこも肥料は都市の屎尿しりょうで、それに金肥かなこえとして大豆粕大豆（満州から輸入）、鯨粕じしん、鰯粕いわし、棉実粕綿実ぐらいであって、硫酸や燐酸、カリは後年になってからである。

父は名古屋屎尿組合の組合長であり、肥船こえふねの船頭であった。肥彦こえひこという別名をもっていて平気であった。一荷、十六貫、大便十二錢、小便十錢で大繁昌であった。肥船が河岸につくと、組合員は堤防上に肥桶を担いで行列した。残念ながら、この給源さえも海部郡に権利を取られて枯渇して組合は解散した。

## 機械化

大正の中頃であった。あっちこっちに小作争議が起こったが、私の地方では争議は起きなかった。そして、農地の返還が流行した。地主も困って、田畑に植林をした人もあった。父は荒田を惜しんで、地主と協力して、大百姓を企画した。そのため機械化による省力農業を考えた。烧玉式エンジン発動機を利用して、土臼つみすを廻しもみす糶もみすりをした。ずいぶん骨を折ったが、上手にできなかつた。そのうちに小型発動機ができて、それを利用して成功した。



焼玉式エンジン発動機を利用した久野家の稲の脱穀風景

## 県下一の農業

農業の有畜化、機械化によって四人の兄弟は青春を忘れて百姓に精を出した。父は農業に  
関することなら、子供達の希望に応じて投資してくれた。わが家は面白い百姓をやり、県下  
一の農業を誇ったが、農業以外のことは知らなかった。

父は子供を皆百姓にしたいと考えていた。この父の盲愛の虜よりことなつて、私達兄弟は、ただ  
体だけ馬鹿強い芸なしの働き男で一生を終わることになった。

そして、ただ県下一の有畜農業、機械化農場として名を挙げた。

田植えの思い出。父母は健在、妻は健康、若い実習生は大勢いたが、  
体力では私に勝るものはない。働いても、働いても、疲れを知らない四  
十代の働き盛り、世の中が意のごとくなる思いで有頂天になつたが、そ  
れは小さい自己満足営農のワク内だけしか知らない、いわば、雨垂れ、  
大井川、世間知らずであつた。

どこの社会でもそうであるが、とくに農業社会では、農業改善や指導  
奨励しても、きき目が遅い。利益を上げて見せなければ、みんなは動か  
ない。これを促進させるためには、利益を上げて見せた方が早く普及す  
る。というようなわけで、私達はさかんに営農改善して儲けて見せた。

二、三の例を示してみよう。

## 養牛

父は農耕牛も導入した。これまで、村で牛を飼うと、ことごとく失敗する。氏神様が牛は嫌いだという迷信を加藤獣医が打破して下さった。しかし村人は牛を嫌った。牛は畦道をこわす、牛の糞を踏んだという苦情がきたが、牛車、牛耕、牛糞の利用と乳牛を飼って牛乳をとり儲けて見せ、有畜農業の模範を示したので、人も真似するようになり、同時に、県も有畜農業を奨励するようになって、ちよつとした農業革命が起こった。昭和十五年頃は一戸に一頭の牛が飼われるようになった。

県や国も、このような経営を奨励した。私の所の経営を見て、次第に有畜農業が増加してきた。

その頃、私の家は五町歩余の二毛作経営をして、当時一畝の稲作に、およそ二〇〇時間の労働がかかった。五ヘクタールの二毛作をすると一万時間を要する。

わが家は父母と私達夫婦と子供であった。母は炊事、子供達は通学、働き手は親子三人で一万時間は思いもよらない。

日本農業は人夫賃を支払って、引き合うものではない。そこで私は「代数農業」といわれるように、自分の仕事は必ずしも自分でやる必要はない。必要なものを近所の人々と交換し合って経営をする。いわゆる「手間代わり農業」を考えた。具体的にいえば、私が他人の家の牛耕をしても賃金をもらわず、そのかわり私の田畑の牛でやれない仕事を人手で手伝ってもらう。

たとえば、人が耕すとすれば、一日一〇アールが限界であるが、牛耕すれば、五〇アール



左から2人目・山崎延吉先生。  
一人おいて右が久野庄太郎、岩槻信次

以上できる。そこで私が牛で手弁当で牛耕すると、牛耕では一日で五〇アール以上できる。すると先方から手弁当で五日間働いてくれる。田植え、田の草取りは女手の方がよい。これが非常に人気を呼んで、相手にも喜んでもらえる。

また、農業用水に不便な土地であったから、私の家の二インチホースと発動機とポンプで田んぼに水を汲み上げて米をとる。ポンプ油つき一時間で一日の手間代わりとなって両方が助かる。これは大変人気よかった。

乳牛は飼料用の麦やさつまいもと交換、あるいは草取りと交換して、面白い農業を十年間やった。人々も私のやることを真似して機械を買い、豚を飼い、牛を飼い酪農経営する人が多くなり、県でも有名になった。

折から農村不況の時代（大正の初めから昭和の初期まで）がやってきて、農村の自力更生が叫ばれ、農業会が中心となって、営農改善が進められた。

県下での篤農家を、山崎延吉先生、県の農業試験場の岩槻信次技師、参木晋七郎氏が指導して、愛知県研農会が組織されて、経営改善、食糧増産にあたった。後年、この人達が久野庄太郎の愛知用水運動をバックアップしてくれた。（二二四頁の「研農会員名簿」参照）

有畜農業は一見、「楽農」に見えるが、内輪はなかなか苦農であった。すべて生物には病気があり、豚も牛も、鶏も飼育数が多くなると、一度病気が流行すればおしまいである。これが順調に経営で



脱穀も終わり、籾入れ後の米の調整をする久野家の人びと。右端は庄太郎の妻はな

## 父の死

私の父は前にも述べたように、大柄で、ものごとにこだわらない働き者であった。そして仲間仕事が好きで人であった。

昭和十八年三月、六十九歳で亡くなった。頑丈な父が死ぬとは夢にも思わなかったのに、

きたのはけっして偶然ではない。獣医学の大家、加藤不二雄先生（後述）の指導があったからである。

十九歳にして渡米、サンフランシスコ大学の獣医科を卒業、十余年間の研究の後、懇望されてハンフォード家畜病院の副院長となり、とくに乳製品の研究をされて、米国に帰化する決心をしておられたが、横須賀の実家の老院長の必死の懇望により、ついに翻意されて帰国された。米国の老院長夫妻は、「病院を譲渡するから相続してくれ」と引き止められたが、孝養のため、一生の志を中断して、大正の半ばに帰国された。

先生は、

- i 自己の仕事を研究徹底させること。
  - ii 常に偽りのない生活をする事。
  - iii 後進に対して愛情を持つこと。
  - iv 迷信を排除すること。
- など身をもって私に個人教育をして下さった。

忽然として死んだ。

時に私は四十四歳、まさに人生の最盛期。あまりの悲しさに、子供のように泣いた。今日まで孝行らしい孝行をしていなかった。父は肝臓病であった。二カ月くらい病床にいたが、しだいに衰弱して、主治医のすすめもあって、ほかの医者にも診てもらおうことにした。父はやめとけ、誰が診ても同じことだ。こんな時、あわてると、無駄金を使うだけだと言つて許してくれなかった。死にのぞんでも、家のため、子のためを思い、父はすでに決心していたらしく、「人間ぐずぐずして長生きしていても無駄だ。働きまくって、早く死なねばいかん」と言っていた。

私はその頃、大政翼賛会の理事をしており、その縁で、名古屋大学学長で医学の大家である勝沼精蔵先生を知っていた。事情を話して、八幡のわが家まで来ていただいた。

先生は、父の手を見て、嘆声を発して、「あ！ よく働いたもんだ、このような皮膚を未だ見たことがない。庄太郎君を社会が使い過ぎたために、あなたが働き過ぎて、病気になる。私達にも責任がある。私も努力しますから、あなたも、どんな薬でも飲んで、また、注射も受けて治療に協力して下さい」と言われた。

先生が帰られてから後で、父は喜んで、こう言った。「われわれごときものが勝沼先生に診ていただけることは光栄で、俺は畑の中で鍬を突き立てたまま、どうしても、その鍬が引き起こせずに死んだと言え。死ぬのは残念だが、働き過ぎて死んだと聞いたなら満足だ。

人がどうして死んだと聞いたなら働き過ぎて死んだと言えば満足だ。畑を耕して鍬を打ち込んだが、どうしても、その一鍬が引き起こせないで、止むを得ず寝込んで死んだと言つてくれぐれも頼んで死んだ。



久野一家。前列中央・母よし、父彦松、後列左から二人目が庄太郎

父はつねづね、「俺は田の中で立ち往生するぞ」と言っていたが、本気であったと、この時思った。

父は非常に質素な人であった。一生涯、飯よりほかに美食の味を知らなかっただろう。だから、食いの注文はない。看護も楽であった。ただ、「あの山田の清水はおいしかった。あの山田の清水が飲みたい」と言うので、早朝汲みに走った。ついでに麦の穂を取ってきて、草丈ののびたのを父に見せて喜ばした。とにかく辛抱強い人であった。

病中、気を使って、「病人は苦しかったら唸ると楽になる。唸りなさい」と言ってみたが、ついに唸らなかった。

父は病氣中、四男はすでに昭和十三年に戦死し、二、三男は従軍していたが、愚痴は言わなかった。病苦の激しい時には私を呼んで、「今の戦況を読め」と言い、戦場のことを思って、それで病苦を癒していたらしい。「自分の病気で金を使っただけで困るだけだ」と言っていた。勝沼先生の薬や、注射を受けて、「ありがたい、ありがたい」と言って、「治る、治る」と気を紛らわしていたらしい。今日の気分は

どうかと聞くと、必ず「今日はよい」と答えて看病人に気をつかって、ありがとうと言い、親しい人には、それとなく死別の挨拶を交わして頼んでいたようであった。

非常に義理堅い人で、命があとわずかだと覚った時に、「厄介になった人に米一俵進呈せよ」と言い、米や食物の移動禁止の時であったが、父の必死の頼みであったので、そうしたと言うと、安らぎの色を示した。

春が来て勝沼先生も言われたが、病気は快方に向かっていると云えば、「うんうん、そうだ」と相槌を打っていた。お互いに死期の迫っていることを知っていて、「何か言い残すことはないか」と言くと、「もうない」と答えた。

戦死した四男、善之助の後が心配かと言くと、「はながしっかりしているから安心だ」と言った。ほかにないかと言えば、「お前が度胸がないから張り合いがない」と言って昏睡状態になり、こと切れた。

私は父に死に方を教えられたように思った。

### 大味な父

今日は父の命日、三月二十一日である。父、彦松は昭和十八年三月二十一日、六十九歳で亡くなった。二カ月ほど病んで死んだ。その三月になると夢のように思い出す。父は母にくらべて大ざっぱな人だった。体重も五六キロあって、細かいことは言わない。貧しくても心配しない。いつも美声で童謡を鼻で歌っていた。

父は調子男、貧乏なくせに他人の世話好きであった。とくに仲間仕事が好きであった。いつも「社を作ろう」といって組合組織を提唱した。「魚釣りの餌掘り組合」「名古屋の尿尿組

合」〔開墾組合〕〔豚組合〕など目論んだ。

今から七、八十年前は二毛作も適当な副業もなかった。農閑期はほとんどまごまごして暮らしていた。百姓は貧しい家に集まりやすかつたらしい。その頃の零細な農家の賃金表が今でも残っている。私の家は寄り合い場所、お日待ひまち（集落の中の小単位の農家の寄り合いをかねた懇親会）の家元であつたらしい。夕方から寄り合いが始まり、そのあとで役員の妻たちが五目御飯や簡単な酒の肴をつくり、懇親会が始まる。みんなこの日が楽しみであつた。お日待ちでもあると、われわれ子供は納戸の隅で小犬のように寄り添って寝た。こうして育つた習慣か、今でも人が来ると嬉しい。誰もこないと淋しい。

父は後を振り向かずに行く人であつた。生産に対しては意欲旺盛であつたが、上手に売ることには力を入れず、後作の増産に力を入れた方が得だと言つていた。百姓はその方がよいと思う。

### 母の愛

今日は母の祥月命日である。歳をとるに従つて、死んだ父母のことが思われる。

父は昭和十八年三月に逝き、母は昭和三十四年三月二十一日に死んだ。

この頃よく夢を見る。夢があればこそ、父母に会える。夢では確かなことはわからないが、死んだら本当に会えるかと楽しみにしている。別に急ぐわけではないが、向こうからは、この世がよく見えると言うから、よくやつたと褒めてもらえるようなことをして死にたい。

私の父母は、私達子供にも、他人にも、内緒ごとはしなかつた。だから私達は、父母を手本としていけば間違いない。母は父が死んだ時、ほろりと一粒涙をこぼしたが、あとは淋し

そんな風はしなかった。それは子供達を信じていたからだと思う。私たちもあの調子で行かねばならぬ。まだ若いのだから今年来年のことではないが、父母を手本として生きていけばよい。

母は私のやることを絶対信じていてくれた。若い時からそうであったが、とくに夢とも幻とも知らぬ愛知用水の仕事に仕えるようになってからも、母は私のやることを絶対に信じて理解し協力してくれた。

母が亡くなって十年になるが、毎年二月になると母のことが思えてならない。十年前になくなった母のことを思って、白髪の老翁が独り泣くといっても、今どきの人はそんな古臭いことに感激するような人はいないと思うが、思うたびに涙がこぼれてならない。

とにかく腰をかけている母のイメージは出てこない。寝た母の思い出は、死病の床についてからだけである。弱々しげな母であったが、八十四歳まで信仰一途に生きた母であった。

今の少年は身体がよく伸びる。学校教育の結果か、私たちの十五、六歳の頃は、すでに生活のために自ら求めて働いて、体の伸びる余裕がなかった。これは生活のためばかりでなく、母の心を安らげたい一心で働いていたのかもしれない。母の喜ぶことが何より嬉しかった。

母は子供が仕事から帰ってくるまでは、夜がふけても横になっていなかった。座って眼を閉じていても居眠りしていない。私どもが帰ってくると、足音で戸を開ける前に、「今帰ったかや」と呼んでくれる。冬は火鉢の中に松葉を一つかみ入れて、膝の上にマッチを置いて、子らが帰ってくると、すぐ火をともして暖をとらしてくれた。母は己のためには一掴みの松葉も焚かず、両手を胸に入れ違いに押し込んで、子供の帰るのを何時間でも待っていてくれた。そして、「寒かっただらう」とねぎらいの言葉をかけてくれた。私は帰る道々、こうし



後列・姉ツル、長男彦一、二女喜代枝、妻はな、長女富久枝。前列・庄太郎、母よし

副業は子供の仕事になるわけであるが、月に十回ほど豚車をひいて名古屋に通った。

当時は曲り道が多く、目的地である名古屋の西区押切の屠殺場まで二五キロくらいあった。時速四キロとして、六時間を要する（今では飛行機でハワイから羽田までの時間）。だから必ず午前二時には家を出発する。宵のうちに、まず荷車の車軸に注油、荷ごしらえして、一寝入りする（時間があれば三十分でも寝入ることができる。これが習慣となる）。

午前一時半に起床、身支度を整える。その頃には地下足袋というものがなく、草鞋わらじがけであつた。食後、車の下に提灯をつけて、ロウソクとマッチ、弁当を袋の中に入れて、定時二時には出発する。

て待つ母を思い描きながら、母に今日の仕事のいきさつを語る楽しみに、一歩ずつ、わが家に向かつて急ぐ足どりは軽かった。

こんな思い出は冬に多い。たわけの一つ覚えだが、「寒い時寒殺、熱い時熱殺」とか、人の気力は冬から春に育つらしい。寒暑を殺して働くことは、若い者の心みを研くように思う。もとより、鍛錬目的で働いていない。食うか食われるか、戦って働くことが、反省すると、よい鍛錬であつたようだ。

わが家の基本は農業であつて、車ひきは、にわかの副業であつたが、小作地さえ満足に貸してもらえない貧農で、その上、子沢山の家は、本副不明である。おおよそ

母は必ず郷はずれまで送ってきて、「気をつけて行ってこいよ」と言ってくれた。

「よしわかった」と答えて真暗闇に向かって、大八車（鉄の車輪）をひいて行く。一〇〇メートル行けば、母のことは忘れて仕事の先々のことを考えていく。四〇〇メートル行くと氏神様の並木がある。当時、そこまでは一軒の家もなく淋しい道である。慣れてしまえば平気だ。ある時ふと気がつく、草鞋の替えを忘れた。しまったと思つて、止むなく車を並木の横に置いて走つて帰つた。先ほどの郷のはずれまで来たとき闇の中で人影が動いた。ドキッとした。とたんに、「何か忘れたかや」と母の声、そして「八幡様の前で車が止まったから、どうしたかと思つていた」と母が言つた。

母は毎回、私の提灯が杜の中に入つていつて見えなくなるまで闇の中に立つて見送つていたのを知つた。本当に終生忘れることのできない母の愛であつた。

### 母の死

母は昭和三十四年三月二十一日に亡くなつた。母が死んでも世間並みの葬式はしなかつた。私が導師となつて、家族、近親者、数十人で般若心経を回向して葬儀は終わった。母はそれで満足していると思う。まだ不老会ができていなかったので、献体はしなかつた。今、母を追憶して十首の歌を供えて、孝養の足りなかつたことを詫げる。

#### ・ 勤勞の母

働きて 心やさしく、気は低く

節高く 指太かりし母

母はやさしく、美しい人であった。そして、よく働いた人であった。

・内助の母

暑き日も、寒の夜更けも いそしみて

夫にも子にも 素直なりし母

私は父母が争ったことを一度も見ることがなかった。母は子供を愛し、そして私達が、いたずらをしたり、学業の成績の不出来な時、「私が悪い人間だから、こんな子になった」と泣いた。

・忍耐の母

何事も 堪忍強き 母なりき

八十三歳 怒ることなし

父は強い性格の人であったが、母は優しい性質の人であった。今もなお、老兄弟が、仲睦まじくあるのも、われわれの結婚生活の平和であったのも、母の忍耐強き生き方の賜物であったと思う。

・信仰篤き母

戦に 吾子失えど 信仰に

心ゆるがず 生きぬきし母

私達が信仰をもって生きてきたことは母のお陰であった。雨の日も、雪の降る日も欠かさ

ずに、母は弟の武運長久を祈ったが、弟は戦死した。しかし信仰は変わらなかった。

・鞭撻

愛知用水 進み難きを 悩む子に

愛の鞭もて 励ましし母

私が愛知用水に没入して家事を放任し、家計が苦しくなるばかりであるのに、一言の苦情も言わなかった。そして、「男がいったん決心したことに迷うくらいなら金玉を潰して死ね」と言つて勇気づけてくれた。

・忘れ難き母

朝夕の 電車の窓に 母います

病院を見て 思ひかなしく

母は丈夫な体であったが、八十二歳にして肺結核となった。今日では人心が開けたが、昔は肺結核は血統といつて恥じたものであった。医者は口外せず、本人にも家族にもかくした。このため結核菌が子孫に伝わって発病するので、母はすぐ入院することを主張した。

母は医師から放菌のことを聞き、マスクのない人の入室を拒んだ。私は毎朝一回、妻は毎朝夕二回枕頭にあつて一カ年過ごした。

・忽然

駈けつけし 子に会うことも 叶わずに

思い残して 逝きませしか母

私は二十一日に帰宅して、妻はまだ病室から帰宅の途中の頃、母の訃を病院から聞いて、急行したが、もう息はなかった。

・後悔

息絶える　せつなに母は　わが子の手を

求めしに　今なお悔む

母は息の絶える時、私の手を握って死にたく、わが手を求められたであろうに。

・帰らぬ母

あつたかみ　まだ残り声を　限りに呼べど

遂に答えまさぬ　わが母逝く

・懺悔

朝な夕べ　香華たむけて　合わす手の

細くなりしを　わが母に恥じつつ

われわれを育ててくれた母の太かった指に比べて、私は百姓をやめてぶらついているので、指が細くなってしまうた。母に恥ずかしい。

お笑いになると思うが、私は母が亡くなったとは思えない。六十五歳になって、なおも母

の愛に抱かれていると思っっている。

迷った時、母を思い出して決心を新たにしている。

### 旱魃との戦い

知多半島方面で、よく使う言葉に、「知多郡ちたごおりの雨蛙あまがえる」とか、「知多郡豊年米食ちたごおりほうねんこめくわず」と、この地方の人も自らを嘲あざわって言う。雨蛙は、ちよつと日照りが続くと雨ほしさに、やかましく鳴く。また、知多郡が豊作に近い年は雨が多く、用水のある地域では、日照り不足で不作になるということである。

日本列島のようなモンスーン地帯では、天気は西からと言って、小笠原付近の夏の高気団の縁辺に沿って、西からの低気団が周期的に押し寄せてきては雨を降らすが、小笠原の高気団の強い年には西からの低気団が日本海縁辺の山脈で雨を降らして、瀬戸内、近畿地方、東海地方は西風だけで、雨が降らない。こんな年が二年に一度、三年に一度はやってくる。また、池に水があつて田植えは順調にしたが、七月、八月にかけて、夏の小笠原の高気団の張り出しが強く、夏の雨がなければ、四、五日で田んぼの水は干上がってしまう。

また、冬から春にかけて雨の少ない年は、田植えを延ばし雨を待っている。稲は短日性植物であるから、夏至が過ぎ、毎日の日照時間が少なくなると穂の基（幼穂）ができて始める。夏至はふつう六月二十一日頃である。昔から「半夏生はんげしやう、半作」というが、半夏生は、七月二日頃である。これは夏至が過ぎ、七月二日過ぎに田植えをすれば、穂の基のできているものを植え替えるるので、そのまま小さな穂が出たりして、収穫は半分になってしまうということである。

そのため、日本の稲作農家は家族労働で夏至前後（六月二十一日頃）一週間くらいで田植えが終えられる経営規模（一人一日の田植え能力は一反「二〇アール」、三人で三反、五日間で一町五反「二・五ヘクタール」）が経営規模の限界であると言われていた（日雇人足を入れれば別）。これは降雨順調でのことであり、一家一町歩というのがふつうの考えであった。だから、田植え姿は茜櫛あかねたすきに昔すげの笠という、箱入り娘も引っぱり出されての田植え姿の昔の風景であった。だから一昔前の田植えは重大な行事であり、また、大変な重労働であった。もう今では、田植え儀式か何かでなければ見られない。今では田植え準備の耕耘こううんから、代掻きなど、一切トラクター、すぐ後を追うように田植え機、苗はハウスで育った箱苗、戦前に誰が今の田植え姿を想像したであろう。だが、これらの一連の作業も、計画的な水がこなかったら一歩も進めることはできない。

知多半島の地形は、名古屋の東南、伊勢湾に長靴のように突き出した半島である。地質は第三紀の古層を基盤にして、表面は猪高層、八事層、常滑層である。低湿地は洪積層または沖積層で埋められ、大府、大高の旧東海道線以南は南に行くにしたがって南海トラスに押し上げられ、常滑層、第三紀古層が主体となっている。標高は大府、大高の旧東海道線付近で折れ曲がり、最低で四〇メートル前後、この付近を東海道線沿いに深溝断層ふかこうずが東西に走っている。低位部の沖積層は付近から流出した流出物で埋められて比較的肥沃である。また、ところどころに一、二万年前に噴出した珪酸分の多い火山灰で埋められている所もある。たとえば、大府市木の山の砂層、上野間台地など、生産力も高く優良農地となっている。これは鹿児島湾が火口のシーラ火山（一万〜二万年前長期噴火の堆積物）であり、戦前、磨砂みがきすなといわれて掘り出され利用されていた。

半島は南に行くほど標高は高くなり、常滑層、半島の南端は第三紀古層の頁岩の累層を形成しており、最高標高は一二八メートルの山海高根がある。このように南高北低の地形は用水を流すには条件の悪い地形である。

### 雨乞い

田植えは雨に恵まれて終わったとしても、夏の日照りは強くなり、稲の成長は水の要求がますます大きくなって、大池の水も底が見えてくると、各村、各字々で「役水」という池係の役員が出て、池の水の枵いりから出す量を制限して、水路の順序規定にしたがって農地の一方から水をかけて行く。

その頃になると、字ごとの役員が氏神様に集まって神主を招き雨乞いの神詞のりごとをあげる日ときめ、村中の人が集まって雨乞いをする。

その年の状況によって字の代表を定め、三重県の多度神社に参拝、祈祷をあげ、お札を受けてきて、村中総出で氏神様で祈祷をくり返す。その程度により、黒弊くろへいさん、金弊きんへいさんとあり、途中で下に置かないように（下に置いたらそこに雨が降ってしまう）廻り持ちで氏神様まで持ってきて神主を招き祈祷をくり返す。あとは降る雨を待つのみ。それでも願いがかなわないと見たとき、その村で一番高い山の頂上の天焼き台で、村中総出で麦あやわらを持ち寄り、塔を造って、神詞をあげ、天も焦げよとばかり、いっせいにわら束の塔に点火して雨乞いをする。

## 水汲み

この地域の水不足の田畑で、池や水路より高く、水のかからない地域に水を汲み上げるのに、長い棹を使う掬釣瓶はねつるべと直接桶で汲み上げる二つの方法がある。大野の南、鬼崎付近では、夏になると掬釣瓶の棹が林立するが、ふつう、七、八リットル入りの桶で人力で汲み上げている。

この地域の農業の夏の労働の半分は水汲み作業であった。お皿のような溜池の水深は平均一メートルくらいで、一年中の雨を大切に溜めておく。田植え時期までに池が満水になるのは三年に一度くらいである。

それでも、その池下にある田は上田、池の上の方にある田は下田（天水田）、上田は十年に七、八年は一反当たり六俵（三六〇キログラム）は穫れた。池の上の田は下田、これは十年に二年くらいが満作（六俵）、五年は半作。あとの三年は収穫が望めない。そのため上田の小作料は平均四俵、残り二俵で、労働はもとより、種子、肥料一切の経費をまかなうのであるから、肥料代が滞るわけである。

池上の下田（一名棚田という）は小作料は反当たり二俵である。下田も水さえ汲めば、五、六俵は取れるから、貧農は命がけで、下の池から水を汲み上げる。落差一メートルぐらいの棚田へ池から桶で水を汲み上げる。三〇〇〇杯ぐらいで一応、一反の田に水が行き渡る。一段目から汲み上げた水をもう一段汲み上げるのを「二ツがえ」という。さらに二段目から三段目に汲み上げることを「三ツがえ」という。

桶で一〇〇杯汲むごとに畦豆あぜまめの葉を一枚取って、豆の葉が一〇枚たまるとに腰を伸ばして汗をふく。焼けつくような土用の日を受けて、草いきれのするぼた（畦畔）にはりついて



搦釣瓶。渇水期にはテコの原理を応用した搦釣瓶を用い、低地や井戸の水を田んぼに汲み上げた

汲み上げるので、襦袢も禪もしほれるような汗だ。

足にはヒルが吸いついて、唐辛子のようにぶらさがっている。そんなことを気にしては能率が上がらない。片方の足でこすり落として汲み続ける。池の水がある間は汲めるが、水がなくなれば、それまでである。水の切れ目が、水田の命の切れ目である。諦めねばならない。三〇〇〇杯汲んで一服して畦を廻って水もれを調べる。こんな時、明治用水のように、山の上から水が流れてこないかなあと思ひ、富貴村の森田萬右衛門さんの話を思い浮かべて

いた。

大池も、棚田の連中に長くは水を汲ませなかった。肝心な池下の上田の水が足りなくなれば、杵を抜いて上田に水を廻す。たちまちのうちに池の水位が下がって、桶では水が汲めなくなる。命がけで汲んだ水も数日で干上がってしまう。十日も過ぎれば、田面が白くなってくる。それから十日も過ぎれば、稲の葉が黒くなり、葉がよれてくる。万策つきて雨乞いとなる。笛や太鼓で氏神様で評定である。それから十日も過ぎれば、稲はまったく枯れてしまう。

地主も損だが、種を蒔き、苗を育てて田植えをし、肥料を入れて水を汲んだ百姓は大損である。こんなことが先祖伝来続いてきて、私も四十五年間続けてきた。

そこで揚水機とホースを買って灌漑を始めた。みんな、それを始めた。これは大変だ、と池下の上田の方から断ら

れた。限りある水をみんなが取り合っている。

青年時代に指導者から聞いた。木曾川の水を山腹伝いに川を造ってくれば、知多半島に持つてこれる。そして、尾西や碧海（安城、刈谷、知立を中心とした西三河一帯）のように、水汲みも水争いもなくなる。何とか木曾川の水がほしいと思う心が病みつきになったが、あまりにも大事業。都築彌厚翁の話も森田萬右衛門の話も聞いている。恐ろしくて言い出せない。

### 米泥棒

昭和十九年、二十二年と重なる旱魃。敗戦、食糧不足、秋の収穫も終わり、供出用にと納屋に置いていた米を一夜に盗人に取られてしまった。当時二十二歳の長男彦一は、今度来たら、ぶち切ってしまうと、日本刀を抱え夜番したが、もう来なかった。

物騒な世の中になったもので、名古屋から必死になって闇米を買いにきた人がいたが、私のところは一切売らなかつた。当時、私のところは借地がほとんどであったが、十五町歩ぐらい耕地をもっており、供出を満額しても、食糧の余裕は相当にあった。

しかし、戦争中の報国翼賛会の人で、闇米を買うことのできない人達に公定価格や物々交換で分けてあげて感謝された。

世の中は強いもの勝ちで、集団強盗も横行し、また闇米を買わずに餓死した裁判官もあつた。戦後、愛知用水運動に協力してくれた人達に、この時、助けてあげた人達が多くいた。平素の真心の交際がいかに大切か知つた。

## 愛知県研農会員のこと

戦時中、勤労報国団や供出完納運動をした仲間が、戦後、愛知研農クラブを結成して、山崎延吉先生、岩槻信次、みつぎ参木晋一郎の指導によって供出完納運動に協力した。

そのなかに安積得也愛知県経済部長がおられた（安積氏については後述）。

（長男の彦一は父を助けて愛知用水運動、不老会、海外開発などで協力したが、父に次いで早く亡くなった。彼が研農会の会員の伊藤告重の話をしてくれたことがあった。「今日の農業行政はまことに不合理だ。肥料や資材の配給は、まるで、盆栽に水を与えるのに盆栽に合羽を冠せておいて、上から水をかけるようなので、水は横流れして根本に水がかかっている。これでは、いくら政府が行政に力を入れても供出にはね返ってこない。今の農業会の行政はしっかりしなければならぬ」と身ぶり手ぶりで話してくれた。浜島も昭和十九年一月、豊橋の予備士官学校から名古屋の陸軍幼年学校の「生物」と「現地自活」の教官に転任した際、豊明の従兄三浦青一から「篠岡には伊藤告重という男がいるから相談に乗ってもらえ」と紹介を受けた。現地自活の指導を受けた。そのこともあり、話がよく通じた。後年、愛知用水の運動には、地元を代表してよく協力してくれた——浜島）

## 子の意見に目覚める

昭和十九年の春、夕食時に、幡豆郡横須賀町の鎌田由一氏が移植麦の栽培法で大增収をした話をしたら、長男彦一に、「親父さん、人のやったことばかりに感心していないで、自分でも人が感心するようなことをやったらどうだ」と言われて、子の言うことであつたが心にとたえた。その年は春から梅雨もほとんどなく、夏がきても雨が降らなかつた。そして春か

ら山田の水汲みに奔走させられていた。

「お釈迦様のような偉い人でも、一度に悟りが開けず、大悟すること幾十回、小悟すること数知れず」と言われたと伝え聞いている。まして、自分のような凡夫には、誤ったり、迷ったり、事が大きいだけに、くり返すこと幾十回、しかし、用水建設のことは忘れたことはなかった。

私は幸いにお師匠さんがよかった。よい話を聞きたびに「よし、やるぞ」と感激して、また、さめる。出征軍人を送る。戦死の公報がくる。食糧が逼迫する。農民の職域奉公が足りぬ。「俺がやらねば誰がやる」と力み立ち、また、俺のような貧乏人が威張らんでもと、しよげる。当時の私の感想が、「麦踏めば、世が思われて、めぐりかえれば、また麦思う、おろかも我」と手帳に書いてある。このように容易に決心がつかなかったが、昭和十九年の早魃、二十年の敗戦、二十二年の再度の大早魃にあつて、どうしても自分のことばかり考えてはいられなくなった。

私の村内では、自分の家から出征者も出さず、戦争にはかかわりなく、ただ食糧の闇売りに専念している農家があつた。この人は、この大日照りにも私有地の池の杓を抜かなかった。彼いわく、「池の杓を抜いて水を落として米をとつても、皆供出だ。杓を抜き水を落とせば、池の堤防の刃金がひび割れして、池普請は自費だ。来年からはどうする？」

私は「何をぬかすか、この生地獄に」と、憤りを感じた。まもなく、また照り込んできた。八月一日から八月十五日まで、自分の田、他人の田、区別なしに昼夜兼行で水汲み奉仕した。その頃私は発動機とポンプと一三〇メートルのホースを持っていた。

池でも河でも水さえあれば汲みつづけた。戦死者の家、未亡人の家、気の毒な人の田んぼ

と、頼まれるまま汲みつづけた。ただ油は配給である。横須賀警察署に気のきいた係官がいて、本人が頼みに行くのと二升券を手渡してくれた。二升券で一反歩くらい、一応、水がうるおう。また、次の田、次の田と道具を移して汲んで廻った。機械は私がいないと故障が起きるので、三度の食事も家から運んで汲みつづけた。だが、油のない人は汲めない。

お化けが出た！

夜は機械をかけたまま、小川の畔に蓆むしろを敷いてごろ寝で夜を明かした。ちょうどその日は、お墓の近くで、朧おぼろ月夜であった。私は臆病で、墓場が嫌いであった。

夜中の十二時頃のこと、所の字名も「狐橋」の下流。嫌だなあと思いながら、発動機の爆音で気を張って、小川から水を汲んでいた。

知らぬ間に居眠りを始めたらしい。ガサーツと音がしたので、目を開けて見たら、五、六メートル先の草叢くさむらの中に白い着物を着た女が立っている。「出た！」と思うと、背筋に寒気がした。とたんに女がにつこり笑った。ハツと思つたら嫌かかあであった。浴衣着で団扇を持って近づいてくる。「蚊が刺すだろうと思つて、あおぎにきてあげたよ」。驚いた。いや、まったく驚いた。「終生忘れ難し」である。

それでも、まだ雨が降らない。だんだん小川の水もこと切れてきたが、内橋の濁り水を夜通し汲み上げた。爆音に気を取られて、明け方になつても気づかずに、グラスの小灯をそのままにして樋門にもたれて眠っていた。

何やら音がするので、眼を開いたら、六十くらいのお婆が私の前に座つて、「三百円でも買います」と合掌して拜んでいた。一番電車で降りる人は、汚いモンペ姿で買い出しに行列

だった。あの悲惨なさまを私達は忘れてはいけない。米一升（約一・八リットル）二〇〇円がふつうの闇相場であったから、三〇〇円でも買うといったわけであった。

まったく雨は降らなかつたから、小川にはもう水がなくなり、八月十五日には引きあげた。髯<sup>ひげ</sup>は伸び、油煙だらけの私の顔を見て母は笑った。ホースは折れ目から穴があいて、九月下旬になってようやく雨が降った。一般の稲田はほとんど無収穫であった。一番よく水を汲んだ私の田んぼはどうか稔った。

真心で水を汲んだ結果は

水を汲んでやった田んぼはどうか半作は取れた。

やがて、供出の検見が始まったが、案に相違して、組合にきた割り当てだから組合員の中で穫れた田から出すということで、全部供出してしまった。私は承知できたが、水を汲んでもらった未亡人や遺族の人達は泣いた。「庄さに汲んでもらわなければ、少しは残っただろうに」と私はつまらぬはめに陥って悲しかった。

やはり、個人池の杓を抜かずに、池の刃金を痛めずにすんだ人が利口であった。まったくつまらぬ世の中になったものだと嘆いた。

いくら農業技術を改良しても、働いても、水がなくては何にもならない。土地条件をよくしなければ百姓は駄目だ。何としても、三河のように、降っても、照っても、安全な用水建設をしなければならぬと強く考えた。

こうして昭和二十三年の春を迎えた。

## 農産物の出荷統制

一生のうちでやりたいことは沢山あったが、その中でも農産物の出荷統制だけはもう一度やりたいと思った。しかし、もうやれない。今では農業協同組合ができて立派にやっているから、もう心配ないし、私自身も土地をなくして、働く百姓でなくなったから、やるにもやれない。私の父親は貧農であったが、いろいろ協同の仕事をやって、その帳面が残っている。そのお陰か、大正十三年十月、愛知県農業会長堀尾茂助から篤農家の表彰を受けている。

昭和十年二月十一日に愛知県知事篠原英太郎から産業功労賞を受けて、同日、私は愛知県農業会賞を受けた。



縁先でくつろぐ、ありし日の久野夫妻

近所の人喜んで祝って下さった。父は、しみじみとして、これでいい気になっていたら天罰が当たるぞ。少しでも人様のお世話をさせてもらわんと災いわざわがくるぞと畏れた。親の性質が子にも似るのか、今でも親の言葉を信じている。とにかく、その頃、私の家は冬作の玉葱一万貫、馬鈴薯六〇〇〇貫を水田裏作で穫って愛知県一の百姓であった。

当時は農協がなく、農産物の出荷組合はなかった。個人のバラ売りで、荷物の規格も容器もない。たまたまあっても、申し合わせの荷造り組合くら

いであつた。地元相場は仲買人次第であつた。「東京から安値の電報がきた」といえば、すぐ二割、三割値下げだ。それでも、後勘定で押しつけてきた人は要領のよい方で、相手次第の捨て値売りであつた。仕方のない泣き寝入りの損失と、不合理の意気地なしの取引きであつた。何とかしたいと毎年見送つていた。そこで親子表彰に感激して、出荷統制をやる決心をした。

その頃の農村指導は農業会であつた。そこで農産物出荷統制組合の設立を決心して、郡農会（名鉄知多半田駅前）に行つて、幹事森川（昭和十八年死亡）と技術員田村金平に会つて、所信をのべ、尽力をお願いした。

数日後、二人が私宅へ来訪し、その事業の必要性と実行の困難さを教えられ、重大事業であるから、しばらく待てといつて、親子表彰記念に、古歌を添えて鏡を下さつた。

誓いたる 今日のを 鏡とし

時々写せ 己が姿を

実に終生難忘の感銘であつた。そして二カ年間の研究と準備を重ねた。やがて、昭和十二年の一月、郡農会が中心となつて、われわれは使い走りということでも出荷組合ができた。二月の早生薯、五月の馬鈴薯、玉葱の完全な統制出荷が行われ、十一月十五日、決算がすんで、その年は終了した。私は十カ月半、無給だったが、喜んで奉仕した。組合は私に対して、お礼金、五円也をくれた。私は奉仕のつもりであつたが、せつかくのことゆえ、いただいた。

内心は、今年の失敗や経験を参考にして、来年もやる心づもりでいたので、同僚や委員の精神的協力に感謝するつもりで、お礼金で二宮尊徳の『報徳要典』を二十冊求めて各位に贈呈した。明けて二十三年となつた。農民の寄り合ひは寒中がよい。百姓は地の凍っている間

は落ちついているが、「寒」が明けると、どんな名案も、名言も聞き入れてくれない。それほど百姓は自然の子であり、仕事の鬼となってしまう。新年度の出荷組合の計画を早く進めるよう組合の幹部や先輩に話したが一向に動かない。一月、二月といたずらに日を過ごした。

やがて協議の結果、新年度の委員の中に私の名前がない。私は驚いて、せめて庭掃はきにでも使ってもらいたいと嘆願したが、聞き入れてもらえない。地元の友人の平松某から、地下足袋姿の私に対して、「君は来るな。おぬしは、去年の出荷統制で、送荷先から裏金を取ったとの評だ」。ああ誰の中傷か知らずに、毎日のように出かけて行った自分の姿が思い出されて、われながら、みじめで嫌になった。世の中は、こんなものかと嘆き悲しんだが、あれほど一生懸命で努めれば、努めるほど、ただで勤めているはずがないと邪推されて、いい気になっていた自分の姿が本当にみじめに見えた。

イ もう一年、統制出荷すれば、組合員も、こういうものかと癖がついて、私欲の個人売りはやめるであろう。

ロ もう一年辛抱して統制出荷すれば、この地方の仲買人もあきらめて転業するだろう。

ハ 今年は玉葱の出荷生産地、北海道、泉州と協議して、独断出荷をやめて、全国割り当て出荷ができるだろうに。

ニ 東西市場とも話し合いのできる自信ができた。  
まことに惜しいことをしてしまった。天なるかな、命なるかな。

#### 〈反省〉

- i あまり強力に押し過ぎて嫌われた。
- ii 事業は利益ばかりでなく、気持ちである。

- iii 仲買人を組合の要員にする包容力が必要だった。
- iv 今でも無力なもの、三十年前には若造で、世間知らずであった。

#### 加藤不二雄先生の教え

私は先に書いたように、十歳から五十数年の今日まで、不思議によい先生に恵まれた。どの先生も、自分のことよりも、世の中のことが心配になるばかりで、世の中のいっごく者とは少し違う筋の通った人情家ばかりで、困難な問題に突き当たった時には、それぞれの先生の顔が浮かんでくる。あの先生ならばどう考え、どう処するだろうかと考え、自分の行くべき道が自ら開けてくる。卑怯なことはやれない。

前にのべた中野錠助先生のことを思うと、幼い頃の思い出が蘇り涙が止まらない。

その後、豚が取り持つ縁で、漫才の出稼ぎ生活から足を洗い、農家の長男としての道を歩むようになり、私の家は神仏を丁重に拝む風があった。母が信心深い人であったから、神仏を畏れ崇めるくせがついていた。それが嵩じると迷信となる。

それ、いたちが走ったからどうか、烏泣きが悪いとか、夢見がどうか、相性、日柄、方角、と何をやるにも制限が多く、新しいことに踏み切るには大変だ。昼間、大勢で喋っている間はよいが、一度独りになって考えると、打って変わったように、殊勝な気持ちになって、神仏に頼んだり、拜んだりして、新しいことに踏み切ることに躊躇する。こんな家庭に育ったから、新しいことに踏み切ることがむずかしい。

「この氏神様は八幡様だから、牛が嫌いで、牛を飼うと不幸をみる」と未開人の仕来りから一歩も抜け切ることができない。

そこで私の家では豚を飼うことになったが、豚が破傷風（テタヌス病）にかかり、横須賀の加藤不二雄先生と知り合って、私には正しい光がさし始めた。加藤先生は四十年間アメリカに住んで獣医学の研究をした人である。

先生に家畜の話聞いていたうちに、私は先生の思想に染まり、迷信恐怖症は消えた。

加藤先生は礼儀正しい人で、また謙虚な人だった。先生がお宅を建てられ、その疲れで大病をされた。ちょっとよくなされた時、同家に入居していた嘉三さんという人がきて、「先生はこの普請をするのに、始めにご祈祷をせずにやられた。そのため荒神様の祟りで、こんな大病になられた」と言った。先生は「荒神様というのは、どこにおるんだ」。「土の中におられる」と嘉三さんが言うと、先生は「荒神様は、どんな格好をしているのだね」「私も見たことはありませんが、まず見た人はいないでしょう」「そんな小さなものかね。私は何千倍かの顕微鏡で土中の微生物を調べるのが仕事だが、今までに荒神らしいものは見つけなかったよ」。私は加藤先生から土中のネマトーダ（線虫）を見せてもらっていた。

「荒神様は、ご祈祷を喜ぶのか、恐れるのかね」「どちらかわからないが、ご祈祷をすれば崇りがない」「われわれの社会では、どちらかわからないものは信じないが、いったい荒神様は神主を喜ぶのか、祝詞のりとを喜ぶのかね」「祝詞が好きなら神主が読むよりもっとよいものをすぐにでも読んでやる。神主を喜ぶなら、神主よりも、わしの方がもっと上等だよ。それとも、ぬらくらしたような神主がお好きなら、荒神もよっぽどいかも食いだのお」。ついに嘉三さんも往生して逃げだしてしまった。

先生の御意見が荒神様に通じたのか、それからほどなくして先生も全快された。

そんなことを聞いているうちに、氏神様のことも、荒神様のことも、私の心の中で解消さ

れてしまった。

先生は、「速やかに富まんと欲すれば、五犢ごくを飼うべし。中国では三千年の昔、漢の代からそのように教えているぞ」

先生の教えに従って、幾頭かの牛を飼って私は儲けた。私が儲けたのを見て、村中の百姓が牛を飼って儲けた。氏神様も、農民を指導するには儲けてみせるに限る。

### 最新、最高の学問を！

先生は明治八年（一八七五年）、愛知県横須賀町の医家の家に生まれ、明治二十八年、アメリカに渡って、苦勞してサンフランシスコ大学獣医科を卒業された。スタンフォードの獣医科病院の副院長を務め、大正の中頃、日本に帰られて、私が個人指導を受けたのは、昭和の初め頃だった（私が三十歳、先生は五十歳半ばであった）。ずいぶんむつかしい先生であったが、「もう嫌だ」とは思わなかった。先生の話が新しいことと、親切であったからだ。

その頃、私はちよつと手広い百姓をしていて、火のつくほど多忙であったが、先生の話は落ちついて聞いた。

だんだん話が深入りして雑草の名前も教えられた。私の農場はたくさん牛がいて、雑草を牛に食わせていたが、雑草の名前は知らなかった。先生について、胴乱どうらんを肩にかけ、幾日も山野を歩いた。先生は不用草や毒草を教え、新しい百姓（酪農家）にして下さるつもりであった。先生は酪農家の指導者であり、乳酸菌の大家であった。そして危害を受けやすい雄牛の角を焼き取ることの名人であった。

また、とくに乳牛の産褥マヒ治療の名人であった。私達稲作農家にはわからなかった、蟻

の生態についての知識は驚くばかりであった。蟻の社会生活の話になるとニコニコして楽しそうに、人柄が変わってしまったかと思われるほどであった。

蟻は耕作もするし、家畜も飼う、食物の貯蔵もする。また大戦争もする。戦争には斥候も出すし、敵兵の籠落もする。集団移動することは子供でも知っている。

女王蟻があり、蜜蜂と同じように、一匹の女王蟻から沢山の卵が生まれる。そして働き蟻、食糧備蓄蟻と分業する。

先生の生活は、おきでまい掬米五百俵ぐらいの地主であった。これを親子二代で売り尽くされて「耕さんものは耕地を持たぬ」の理想を實行されて、小作地は小作人の希望する相場で譲渡され、宅地は借り主に安売りされ、出入りの者には無料で与えられたから、村人の先生を崇拜することは当然であった。

蟻の本、獣医の本は、いつも外国の原書を丸善から取り寄せられ、本代は相当の金額であった。

先生は、べつに使うわけではないが、「自分の仕事の上で、最新説を知っておかねばならないからね」と言っておられた。

### 銀行員との対話

ある日、銀行の外交員が来て、「できるだけ便利に扱わしていただくから、私の銀行に預けて下さい」と言うと、先生は、「便利とはどういうことだね」と聞かれた。銀行員は、こぞとばかり、「できるだけ高利で預からしていただきます」と言った。先生は、むつかしい顔をして、「つまらぬことを言うでない。金が子を生むわけでない。使うから利子がつく

のだ、利子が高いということは、危険性が高いということだ。安全保管してもらおうには、保管料を出すべきだ」と言われ、銀行員もまいてしまったという。私も先生の話を聞いて驚くばかりであった。

先生の父君も医者であったが、先生とは反対に、ものすごい物欲の深い人であったらしい。大きな家不用論者で、生前に本家を売却されたので、先生は帰国後、小さな茶室に住んでおられたが、失業対策にと、大工や左官に頼まれて、手のこんだ便利な家を建てられた。戦争には強く反対で、出征兵士の武運長久の祈祷が大嫌いで、村中が総詣りするよりは、その電車賃を集めて各町村から国際連盟に「日本の立場を釈明する電報を打て」と叫んでおられた。

#### 加藤先生の直接指導

私は三十歳の頃から三カ年間、加藤先生の直接指導を受けた。朝、私が牛車で野良に行く。妻は後から家事を終えて自転車で田畑にくる。日の入り前になると、私は泥足を洗って自転車で帰り、大急ぎでノートと鉛筆を持って四キロメートルの道を加藤先生の家まで走る。先生は私一人のために熱心に大声をあげて講義して下さる。学課は進化論、遺伝学。はじめはつまらなかったが、だんだん慣れてきて、暗号を編み出して、ノートした。

私が帰った頃、妻が牛車で畑から帰る。家畜に飼料を与え、母のしてくれた夕食。妻は夜業、私は暗号ノートを写し直して、基礎学のない百姓にとっては、フランスの博物学者ラムルクの用不用説、ダーウィン、メンデルの進化論、遺伝学、減数分裂がどうの、染色体がどうの、生殖細胞の染色体半数論、生殖細胞連続不滅説など理解するのに大変だ。

考えてみると、先生は、私を本当の百姓にしようとすると同時に、自分の勉強とも考えて

苦心慘憺されたと思う。思い出すと、今も泣けてくる。百姓の貧苦は無知から起きる。

### 悲報 加藤先生の死

昭和十年六月二十九日、この年は雨も順調で、田植えもよく進んだ。「うちの田植えがすんだら来る」との約束で、若い娘、若い衆が仕事に来てくれていた。昨今とは違って、若い娘や若い衆は顔を見ただけで赤くなる純情な青年男女である。みんな「隠す顔も見せるが、仕事ぶりも見せる」というわけで、仕事の能率も上がった。毎日が楽しくて、田植え祭りのような百姓仕事であった。私の百姓のもっとも得意な時代であった。

その時、あまり走ったことのない母が走って来て、「今朝、加藤先生が亡くなられた」と告げた。十数人の人が田の中で棒立ちになって驚いた。かねてより、先生の御徳を青年達に話していたので、「早く行け」と言ってくれた。

数日前までお元気であったのに、と先生の死を疑って駆けつけてみたが、やはり、先生は亡くなられていた。枕頭の奥さんに詳しい話を聞いた。人柄に感化を受けた奥方は動揺することなく、われわれはお手伝いして、先生のかねてからの意のごとく、少人数で火葬は終えた。何も起こらないが、私は五年間、毎月二十九日の夜は奥方に挨拶に上がった。田植えがくると加藤先生のことと思われる。

### 韓国などからの農業実習生の受け入れ

私の農場では大正の中頃から終戦まで、およそ、三十年間、内地、沖縄、満州、韓国、台湾などから一カ年または一週間と実習生が来た。下手な農場へ、よくも青年が実習に来てく



久野さんの家族と実習生たち

れたものである。

やってみなければわからぬ仕事だが、実習生を預かるという仕事はかなり窮屈な仕事である。朝から晩まで、寝ている間まで、その青年に監視されているようなもので、夫婦喧嘩もできないし、家の者だけで美食をすることもできない。不正があればすぐ見習ってしまう。だから、逆にこちらが鍛えられるようなものである。そのうちでも韓国の青年に一番気をつかった。その当時は南北に分かれておらず、当時は朝鮮といった。三十年もの期間だから、各地からの青年は数百人にのぼるか知れない。韓国からきた人は第一回が昭和五年で、この事業は、天日光一という人が朝鮮育英資金として寄付金を出し、その利子で朝鮮教育会から派遣されたものである。往路の旅費だけ持って来る。一年間の衣食住費、日用雑貨、学習旅行、復路旅費、雑費は受け入れ側で提供する。最初は全国有名農場に七カ所に分けて派遣されたが、私の家に来た青年が帰国後よく働くということ、七

人が毎年、私の家に来るようになった。

早勘定すると、青年を無料で働かして生活の面倒を見るだけならば引き合うように思えるが、子供達が可愛くて、情が移って、面倒を見るようになるので引き合わない。家にも同じ年頃の子供がいて、区別するわけにはいかない。国内の各県から来る青年達は、当然、自分の衣服、寝具、日用品を持参して来るが、韓国の青年は全くの単身である。来るとまず丸裸にして、古くても清潔な下着と取り替えて、着てきた被服を熱湯で処理する。最初はこれに気づかず、家の中が虱しらみだらけになって大変

であった。

私の家は虱を持っていない人も、軽蔑しなかった。それは、私が少年時代、漫才から帰ると虱だらけになって帰ってきたことがあるからである。母はその体験から考えて、虱を持った人の生活を気の毒がり、面倒をよく見た。

#### こちらにも実習

毎朝、夏は五時、冬は六時から駈け足で神社参拝、国民体操。駈け足で帰場。

朝鮮教育会励行の誓詞三カ條。

我等皇国臣民は、忍苦鍛錬、力を養い 以って皇運を扶翼する……

朝のお話、二宮尊徳夜話など、朝食、農作業、夜の話は農業のこと。

とにかく、皆よく働いてくれた。

朝鮮では女は働かぬ。来て見たら、日本の女はよく働く。その女の労働にも及ばない自己の弱さを見て、新入生は考え直したようだ。

朝鮮は若くから喫煙する。ここは禁煙、これは辛かったらしい。私ももちろんタバコをやめた。とにかく食って働く、休む、かくして、十カ月過ぎると体は強くなり、人物もできてくる。

農場の収穫、販売高、収支決算を見せるので、大した収益になっていないこともわかるので、自然と仕事に身が入る。そのため、研修生から「農繁期は朝の話はやめて働かしてくれ」といって働いてくれた。

こんな真心にふれると可愛くなり、お互いの心の底までわかると、夜業の俵編みのとき、

彼らもしみじみと、内地と朝鮮の差のはなはだしいことを訴えた。

私は朝鮮総督府の招きで、功労者として渡鮮したことがあった。そのつど、研修者の家を訪ねて、彼らの指の太くなって、精を出していることを見て嬉しかった。

彼らは、村内の人を集めて、私の話を通訳した。しかし、いつも私の心は暗かった。一例だが、慶尚南道のある国民学校の話であるが、二十年間教師を勤めた先生は次席で（現地人は校長になれなかった）、その年に内地の師範を卒業した女の先生と月給が同じであったことを聞き、この不平等について何も言えないことを知ったことである。

彼らは心から朝の誓詞が言えるであろうか。このことも道当局の人も総督府の役人も無関心であった。

私は南総督府長官に頼まれてラジオ放送をしたが、言葉に困った。こんなことで本当に日韓提携ができるだろうかと思った。

### 弟の戦死

昭和十三年秋十月十一日、中国応山県千河湾において、末弟善次郎が戦死した。まだ戦死はまれな頃であったので、戦死の状況も遺品も全部届いた。公報もこない、十月十五日の新聞に彼の名が華々しく出た。

よほど勇敢に戦ったらしい。しかし、私達はすぐには信じなかった。だんだん状況がわかるに従って、本当だと悲しくなってきた。あの感じは戦死者を出さない家庭では想像できないものである。彼はすでに満州事変にも出陣していて、全軍中、少数の一人として、金鷄きんし勲章をもらっていたほどだから、よく戦ったであろうと思う。

この戦争で日本が負けるなどは、みじんも思っていなかったし、あんな長期戦になるとは思わなかったから、国民はみなきつかった。したがって、戦死したからといって、涙を見せでは世間にすまぬ。この心境は当時の愛国歌謡によく詠われているとおりであった。父はわが子の戦死を万歳で迎えてやった。ついに泣かなかったが、悲しかったであろう。母は彼が出征後一年二カ月間、雨の日にも、雪の日にも、神詣でを休まなかった。母はどのようにか、悲しかったであろう。しかし、泣き顔は見せなかった。

### 悲しい戦争

弟は新妻に三カ月の胎児を残して出征した。その後、無事男の子が生まれたので、写真を送ってやった。遺品として後送された軍隊手帳の中からその写真が出てきた。ああ、彼も人の親であったと思うと、悲しかった。

遺品を届けて下さった戦友から彼の最期の模様をよく聞いた。私の脳裡には、弟の勇ましい戦死の姿が今も映っている。弟はいよいよ死ぬと自覚した時に、きっと故郷のことを思ったであろう。父のこと、母のこと、妻のこと、わが子のことを思って逝ったであろう。私は密かに泣いた。嫁は親族会議の結果、可哀そうでも生家に帰すことになった。

夫に死なれて、わが子と別れていく彼女の心中を思うと断腸の思いであったが、その時十九歳であった彼女を留めておくことはできなかった。子どもはわれわれ夫婦が受け取って育てることになった。妻はよく育てた。添い寝する幼児が出ぬ乳を強く吸う時の痛さに妻は悲鳴を殺して忍び泣いた。その声を聞く方も、これが戦争かと思つて歯を食いしばってこらえた。

苦情なく妻は堪えたが、不思議なもので、二カ年も出ていなかった乳頭から薄い液が出る

ようになった。こうなると痛覚はなくなったらしい。子供は成長したが、また兵隊にとられはせぬかと思うと、戦争は本当に嫌いになった。徴兵は絶対に反対、戦争をさけるためには、

i 少々の侮辱を受けても怒るな。

ii 仕事がなくとも武器を作るな。

iii 義理は悪くても戦争は手伝うな。

戦争へ持ち込むような政治は悪政の極み。俗にいう喧嘩ならいつでもやれる。国民の好きな政治は、

i 侮辱を受けず尊敬される。

ii 仕事もあり、失業者なし。

iii 義理は欠かさぬ、正しい生き方。

むつかしいことだが、やり方はあると思う。「困った時は、元を考えよ」と古人は教えている。元は何か、戦争に負けて衣食住が欠乏したとき何を誓ったか。悪道に落ちた腰抜けどもは別として、祖国は必ず勝つと信じて万歳と父母の名を呼んで死んでいった同胞を思う人々は異口同音に「文化国家建設」を誓った。あの時を思い返せば、このくらいの難局は乗り切るには何でもない信じて、政府はもとより、国民の全部が反省すべきだ。

愚生は戦争に行かなかったが、弟の戦死によって反省した。その反省と刺激によって、衣食住の生産が第一であるという確信が弟の戦死によってもてるようになり、愛知用水建設に踏み切った。愛知用水建設の過程においても幾多の困難はあったが、弟の戦死の刹那を思つて、犬死にはさせせん。戦死の覚悟で頑張った。

## 大政翼賛会の理事を受ける

昭和十六年の秋、私の農場では、私達夫婦、実習生数名と、ひら野田という所で、稲刈りの競争をしていた。残念ながら愚妻が優勝である。その時、留守番の母が電報を持ってきた。「スグ ケンチヨウニ コラレタシ ケイザイブチヨウ」先月、追進農場でお会いした安積得也愛知県経済部長だとわかった。何だろうか。スグとあれば行かねばならぬ。その頃の県庁は威力があった。官報と赤い印が押しあつた。

やはり安積経済部長であつた。事情を聞けば聞くほど、日本の国情は重大なところに追いかまれていた。それで大政翼賛会が設立された。

私に県支部の理事になれということであつた。私などがなるべきでないとお断りした。安積先生は許さなかつた。従来のような名誉や経歴ではいかん。働く農民のうちから一人の理事を選びたい。食糧増産運動に協力してほしいとのこと。ついに承諾した。思えば、私も向こう見ずであつた。今までの前例を打破して、知事を説得して、働く百姓を理事にした。安積さんもいかもの食いであつた。私も安積さんの熱意に感激して真剣につとめた。

理事会が開かれると、各理事さん方は、私が緊張していたほど真剣ではなかつた。

豊橋の五味老將軍は私に「こんな連中を相手にしては、戦争は日本が負けだ。不愉快だ」と言われ、辞任してしまわれた。ごもつともだが、やめられては困ると思つて、私はやめなかつた。

それは安積経済部長の「未完への出発」という文章を読んでいたからであつた。

安積経済部長は、もとは社会問題の研究者であり、法科出ながら文士肌の人で、新聞では、

安積氏を、神主に算盤そろばんを持たしたような人だと評していた。しかしこの神主さんはすばらしい理想派の人で、名古屋市の商業報国団を結成して、後日の企業合同の基を作った人である。一方、農村には、農業報国団を組織して自ら農村を行脚して、米麦の増産を軌道に乗せた。人は不審に思うが、要は安積氏の真剣さに対して意気投合した篤農青壮年の努力を引き出したのである。

#### 安積得也氏の実績

世評は安積氏から神主の装束を剥ぎ取って、戦時下の東京府の経済部長に引き上げた。

その頃、東京都は薪炭に困っていた。北海道に薪はあっても、船舶がない。安積氏は筏いかだの海洋輸送に成功して、東京都民を喜ばせた。私は招かれて、東京都の三多摩地区の農村査察使を依頼されて廻った。何も知らぬくせにあつかましいことをやった。とくに板橋大泉村の渡辺正好君はか多数の都下篤農家と知り合い愉快であった。

いよいよ戦争たけなわの時、安積氏は栃木県知事となった。二宮尊徳を称揚して県民の精神作興に努められた。一例を挙げれば、発明栃木の呼びかけ、さらに小麦の増産計画を立てて、愛知県の篤農家鎌田由一氏を招いて移植麦の技術を普及した。これは降雪であまり効果は挙げられなかったが、拱手傍観していない知事の態度が農家から好評を受けた。

昭和二十年八月十五日、終戦の時に中部六県州副知事として、安積氏は愛知県知事に御在職で、ともに敗戦の詔勅を拝して泣いた。

その後、安積氏は岡山県知事に赴任された。安積知事のはからいで、愛知県側は山崎先生を先頭に、愛知県の精農家三十人が岡山県の雪州寺において、岡山県の篤農家三十人と懇談

会を開いて、岡山県下の農業先進地 興除村を見学した。そして、県下の千谷の牛を買って帰った。その後、岡山県の篤農家三十名が愛知県の視察に来て、山崎先生を座長として篤農家同士の懇談会を開き、愛知県内の各地を案内して廻った。

### 一生青年

安積氏は、追放に先んじて自ら辞して野に下り、その後も新生活運動に終始された。氏は三男一女の父、それぞれ皆所を得られ、後顧の憂いなし（長男はアメリカのハーバード大学の助教授、三男は国際連盟の職員）。

#### 〈安積氏の信条〉

- i 三十歳までは、主としてわがために働く。
- ii 六十歳まではわがためと人のために働く。
- iii 六十歳を超えれば、人のために働く。

これを地でいく報謝生活目標を立てられ、全財産を整理して、その三分の一で湘南の辺地に小住宅を得て、後の三分の二で衣食をなし、無報酬にて三十年、他人のために働かれた。一九〇〇年生まれ（私と同年）の二十世紀に生きる傑物であった。

愛知県の経済部長時代、仲間で愛知県研農会を結成、この組織は食糧増産に奉仕する真心の農家で結成されている。そのメンバーは次の通り。

この人達に愛知用水建設運動の際、いろいろな支援を受けた。とくに木曾川下流域の人達の陰の支援は大きいものがあつた。

〔愛知県研農会員名簿〕 昭和五十二年十二月三日現在

足立 敏明	春日井市若草通四・三三	久野庄太郎	知多市八幡字中島
伊藤 貫一	一宮市千秋町小山七六〇	伊藤 光明	一宮市千秋町小山
伊藤 高雄	西加茂郡三好町明知	杉浦栄四郎	刈谷市小垣江町下四五
石川 清	豊明市沓掛町徳田	竹内 善明	豊田市鍋田町中切
磯部幸一郎	豊橋市飯村町本郷	丹下 善雄	春日井市如意申町
今井 新一	葉栗郡木曾川町黒田	丹羽 甚作	丹羽郡大口町大字小口
小川 長作	渥美郡渥美町中山	原田 新治	碧南市札木町五・二二
太田 純一	岡崎市明大寺町北中平地	富谷 茂吉	知多郡河和町河和
小野田卓司	豊橋市高田町字高田	富谷 元吉	知多郡河和町古布
加藤 男	知多市杓子	松崎 善捌	西尾市矢曾根町
加藤 森一	豊田市志賀町城五一七	田中 竹男	渥美郡赤羽根町
鎌田 由一	幡豆郡吉良町中野	太田 一男	豊田市高岡町竹村
伊藤 告重	小牧市篠岡池の内	朝岡 栄	幡豆郡吉良町小山田

氏名	住所	氏名	住所
駒田 繁一	江南市布袋町小郷	顧問・客員	岡崎市美合町平地
斎藤 武	額田郡額田町細光	田母神利衛	岡崎市美合町平地
鈴木 鋼三	江南市中奈良出一五	鈴木 徹三	刈谷市野田町北屋敷九〇
平岩 幸一	額田郡幸田町坂崎	山崎 延久	安城市桜町三・二
河合 寿作	渥美郡田原町野田	新庄新之助	名古屋市千種区城木町一・三四
高木 劍二	知立市八ツ田	早川 浩	名古屋市緑区鳴海町螺貝
谷川 忠三	常滑市西浦町樽水	河合寛一郎	岡崎市本宿町南ヶ原
大森 昌義	丹羽郡大口町豊田西	市川丈太郎	岡崎市大西町南ヶ原
三浦 青一	豊明市阿野町坂部	石上 孔一	日進市梅森町新田一三五
山田 勉	小牧市藤島町	佐口 岳郎	岡崎市美合町下長
小川増次郎	春日井市大手町一〇六五	山崎 延吉	安城市桜町三・一
大岩 源平	知多郡内海町早稲倉二五	参木晋七郎	岡崎市美合町平地
太田 一夫	豊田市住吉町一・四・二	加藤 正市	横浜市戸塚区和泉町
		岩槻 信治	岡崎市中園町郷中七二

昭和天皇への御進講

昭和二十一年十月、昭和天皇が愛知県下の農業事情を御巡幸になり、その際、久野庄太郎

さんは愛知県知事桑原幹根氏の推挙により県下の農家の代表として、愛知青年師範学校（安城市）において農業事情を御進講申し上げる光栄に浴した。御進講は十五分間ということ、小学生の学芸会のように、お稽古をした。

いよいよその当日になった。敗戦後まもないこととはいえ、天皇陛下は神様のように思えた時代であって、私の緊張は一通りではなかった。まもなくその時刻となり、御前に出た。金屏風の前に菊の御紋章の錦のテーブル掛けを置いた机の向こう二メートルぐらい先に陛下が立っておられる。その後、大金侍従長と松平宮相が立っておられた。最敬礼をしたが、私はボーっとなって陛下のお顔が見えない。やがて陛下が手を出され、私に椅子にかけよと合図されたが、私はテタヌス病のようになって、硬直して椅子にかけられない。

再び陛下が声を出されて、「おかけなさい」と言われたので、ようやく腰をかけた。

陛下は私がかけたのを見て、おかけになった。ほかの御三方もかけられたらしい。何事もわからない。

いよいよ話が始まった。そのうちに、だんだんと自分を取りもどして、お話が軌道にのってきた。陛下も深くうなずかれて、私も話しながら泣けてきた。侍従の三方が真っ白のハンカチを出して、お目を拭いておられることもわかった。十五分ぐらいで話はすんだが、陛下から次々と御下問があった。

米、麦のこと、田畑のこと、水不足のこと、いろいろ申し上げているうちに、「肥料はどうして整えているか」ときかれた。ハツと思ったが「家畜の糞尿で補っております」とお答えしたが、「家畜の飼料はどうしているか」と次々に聞かれるのでまいてしまった。この調子だと、本当のことを申し上げないと通らない。十五分間は敬語の作文の暗誦でどうやら

すましたが、矢継ぎ早の御下問で、肥料、飼料について、御答えしようとした時は、もうすっかり練習の枠からはずれてしまって、百姓言葉となってしまう、「ハイ、闇でやっております」と本音が出てしまった。

陛下はちよつと不審な面持ちで「闇とはどういうことか」と再御下問、私はいよいよ困って、なんと申し上げたか、ご了解いただけないように拝察された。

そして、最後に陛下は、「この上とも農業振興については、しっかりやって下さい」と言われた。ああもつたいたいと思つたら、耐えられなくなって、泣いてしまった。

御前を退去して、廊下に出たとき全身汗。「ああ俺はやるんだ、陛下に頼まれたんだ、やらんでおくべきか」と決心した。

(以上、久野庄太郎個人誌『躬行者』他より)

(註1) 中野錠助先生は海部郡十四山村の出身で、奇しくも浜島辰雄の安城農林時代の同級生の中野一の

叔父であったようだ。